

明治期以降、日本の美術は急激な西洋化の波にさらされます。日本の洋画家たちは、西洋画の写実表現や遠近法などを取り入れ、独自の表現を求めて模索を続けました。このような状況下で、国が主催する文展が創設されます。本県の洋画家では、西都市出身の塩月桃甫が、大正5（1916）年に文展入選を果たしました。また、都城市を代表する山田新一は、大正14（1925）年に文展を前身とする帝展に初入選し、中央画壇で活躍しました。一方、伝統的な日本画の世界においても、西洋画の要素や特徴を取り入れた新しい「日本画」への取り組みが進みました。本県を代表する日本画家として、文展で受賞を重ねるなど日本画界をリードした都城市出身の山内多門、同じく都城出身で、大正4（1915）年の文展において初入選で褒状を受けた益田玉城が挙げられます。

ここでは、これら宮崎県を代表する画家たちの作品を中心に紹介するとともに、郷土作家や本県ゆかりの作家が描いた、季節を感じさせる作品を紹介します。画家たちが描き出した、四季それぞれの表情をお楽しみください。

## ■展示作品リスト

No.	作家名	生没年	作品名	制作年	大きさ(cm)	技法
1	柏原 覚太郎	1901～1977	小豆島	不明	33.5×45.6	油彩
2	柏原 覚太郎	1901～1977	坂手港(1)	不明	41.0×52.6	油彩
3	塩月 桃甫	1886～1954	題不明	1940-44（昭和15-19）	38.3×46.0	素描
4	塩月 桃甫	1886～1954	裸婦	1950（昭和25）	24.2×33.3	油彩
5	塩月 桃甫	1886～1954	少女像	1953（昭和28）	41.0×32.1	油彩
6	山田 新一	1899～1991	ブルクセルにて	1970（昭和45）	37.8×45.4	油彩
7	山田 新一	1899～1991	絵皿と裸婦	1988（昭和63）	100.0×80.5	油彩
8	加藤 正	1926～2016	革命と喪失	1954（昭和29）	115.7×90.5	油彩
9	末松 正樹	1908～1997	日	1956（昭和31）	181.3×164.0	油彩
10	小野 彦三郎	1912～1971	春	1962（昭和37）	72.7×60.6	油彩
11	山内 多門	1878～1932	田家早梅	1920（大正9）	130.0×50.8	日本画
12	中澤 弘光	1874～1964	海水茶屋	1915（大正4）	80.0×60.5	油彩
13	益田 玉城	1881～1955	艶美	1928（昭和3）	115.2×41.3	日本画
14	児玉 実枝	1918～1972	苑	1967（昭和42）	212.2×151.6	日本画
15	岡峯 龍也	1896～1977	彼岸	不明	64.0×78.7	油彩
16	山内 多門	1878～1932	晃山深秋	1925（大正14）	155.2×50.4	日本画
17	杉下 昭明	1927～1994	モノクロの山	1993（平成5）	112.1×162.1	油彩
18	吉田 敏	1915～1965	桜島雪景	1963（昭和38）	76.5×108.5	水彩
19	大野 重幸	1900～1988	氷紋	1957（昭和32）	181.8×157.0	日本画